

派遣先:シンガポール国立大学

受入教員:YUNG Sai Shing(容世誠) 副教授

派遣期間:2009.8.1-2010.2.28

【研究テーマ】

中国白話小説及び戯曲の江戸期日本における受容－都賀庭鐘の位置づけをめぐって

【研究の概要】

1. 研究の目的

都賀庭鐘(享保三年／1718～寛政六年／1794 頃)研究は読本作者としての側面から開始され、彼の読本作品の中でも、題名に「古今奇談」を冠された短篇集の三部作、特に『古今奇談英草紙』『古今奇談繁野話』が研究対象としては最も多く取り上げられている。その興味は、主に中国文学の翻案としての側面に注がれた。原話の搜索及びそれを翻案する手法といった比較文学的見地からの研究においては、現段階では先学によって十全とは言わぬまでも相当の成果が蓄積されている。

ただし、これらの研究は主に個別の作品同士の関係を論じたもので、言うなれば中国文学と日本文学のそれぞれの点を結ぶ作業が中心であった。そしてその中国作品に対する関心は、中国文学史の文脈から切り離され、日本に渡来した独立の作品テキストに対して振り向けられた。

本研究では、これら中国の作品を中国文学の文脈に還元し、そこから庭鐘の作品世界における中国文学の受容の様相を考察するものである。すなわち、個別の作品が中国文学史においてどのように位置づけられるかを示し、さらに庭鐘がそれをどのように自らの作品世界に利用したかを考察することを通し、庭鐘の作品を中国文学との関連から位置づけることを目的とする。

2. 研究の内容

七ヶ月という派遣期間を鑑み、受け入れ先指導教員との相談のもと、まず庭鐘の作品のうち『四鳴蟬』を対象に選んだ。明和八年(1771)に上梓された『四鳴蟬』は、能・歌舞伎・浄瑠璃をいずれも等しく元明戯曲の体例に則って漢訳した異色の翻訳作品である。

都賀庭鐘研究において、二千年紀に入ってから最も注目すべき成果を挙げているのは、川上陽介による一連の『四鳴蟬』研究であろう。それまでに「元曲風」「中国演劇風」と指摘されてきた翻訳スタイルの実態が、川上陽介『『四鳴蟬』試論—謡曲「熊野」から元明戯曲風「惜花記」への翻訳—(2001)により具体的に示され、「惜花記」において用いられる曲牌がいずれも南曲のものであり、曲牌の使用については南戯の形式を襲ったことが明らかにされた。また、川上は「惜花記」の曲調についても詳細な分析を行い、庭鐘がもとになった謡曲『熊野』の詞に合う曲牌をどのように選んだかを推測した。さらに、南戯の中から具体的な作詞のモデルを見つけるべく、『四鳴

『四鳴蟬』曲律考(総論、附各論【千秋歳】)(2003)では沈自金『南詞新譜』に加え、『六十種曲』、高濂『節孝記』、『阮大鍼戯曲四種』、『李笠翁伝奇十種』の実際の戯曲作品 75 部から「惜花記」に見える曲牌を抜き出し、実作における曲牌使用の実態を分析、「惜花記」の詞型と比較が行われた。『四鳴蟬』の曲詞には一見曲牌の求める詞型に合致しないように思われるものが多いが、襯字などを実際の用例に基づいて勘案すると、完全ではないとはいえ、庭鐘は相当厳格に南戯の詞型を守っていることが明らかにされた。さらに、川上「『四鳴蟬』の作詞法について—『玉簪記』との関係」(2005)では「惜花記」から詞型の規格を外れるものについて検討が行われ、高濂『玉簪記』に唯一同型の詞型を見出せることが指摘された。川上の一連の研究により、『四鳴蟬』所収の「惜花記」は大体の結構においては明・徐渭の雑劇『四声猿』を模しているが、曲詞の翻訳に関しては雑劇に用いられる北曲ではなく南戯の曲牌を用い、特に『玉簪記』を具体的な手本として成立した作品であるということが判明している。

この川上氏の成果を踏まえ、『四鳴蟬』の成立についてさらに検討を加えた。氏の研究では主に元曲と南戯との比較から『四鳴蟬』の曲牌について分析が行われているが、全体の結構としては『四声猿』を含む明清雑劇との類似も指摘される。あるいは明清雑劇の中に直接の藍本となったものがあるのではないかと考え、明清雑劇に関する研究書を読みつつ、実作品との対照作業を行った。しかし、現存する雑劇の中には曲牌の使用に関して『四鳴蟬』との関連を認められる作品を見出すことはできなかった。

続いて、『四鳴蟬』のこれまで注目されてこなかった「序」及び「填詞引」について、当時の文脈に即して精読するところから始めた。戯曲の専門用語などは、中国語・日本語の各辞書・辞典はもちろんのこと、索引を頼りに同時代の随筆などから可能な限り用例を集め、庭鐘がどのような定義で用いたかを明らかにした。また、中国戯曲の日本への伝来及び受容に関する先行研究を読み込み、それぞれの基づくところを確かめ、原典の参照が可能なものはできるだけ確認するという作業を行った。その上で、庭鐘が文中に挙げた作品名やそれに対する評価から、彼の中国戯曲の知識がどのような書物を通じて得られたものか、およその輪郭を描き出すことにつとめた。

こうした作業の末、『四鳴蟬』の序文と「填詞引」及びその翻訳の実践における反映を検討することにより、翻訳の角度から『四鳴蟬』を読み解くという課題に到達した。そこで検討されるのは次の二つの問題である。第一に、『四鳴蟬』にみられる翻訳の実践を通じて、庭鐘は中国戯曲をどのように位置づけたか。「填詞引」において、庭鐘は「申樂」を「雅樂」、歌舞伎・浄瑠璃をそれぞれ「俗劇」「俗樂」と位置づけている。「雅」である能と「俗」である歌舞伎・浄瑠璃は、なぜ共に中国戯曲の形式への翻訳が行われたのか。第二に、『四鳴蟬』の白話と中国戯曲の白話はどう異なるかという問題が挙げられる。庭鐘はどのような戦略で白話文を用いたのか。

以上の二つの問題についての考察を通じ、庭鐘の中国戯曲に対する見方に検討を加えた。それによって、中国戯曲が日本に輸入され、どのように理解され受容されていたのかを表す一つの例を明らかにした。

【具体的成果】

上述の研究成果は、「翻訳論としての『四鳴蟬』」の題で日本近世文学会 平成22年度春季大会(2010年5月)において口頭発表が予定されている。

【今後の課題・問題点】

今回の研究では、庭鐘の作品を当時の文脈に位置づけつつ解釈し、中国戯曲との形式上の比較を行う作業を中心に行った。

しかし、まだ表面的な手法の問題が明らかになったのみであり、彼の翻訳の思想的側面を考察するには至っていない。荻生徂徠を中心に、同時代の思想家の言語思想を検討することで、庭鐘の翻訳の営為を思想的側面から位置づけることが必要である。また、翻訳を研究対象にするに当たり、現代の翻訳理論を参照することも有用だと考えられるが、いずれも今後の課題である。

さらに、派遣期間に行ったのは主にテキスト分析による研究であるが、シンガポール大学での中文系の講義の聴講を通じ、印刷文化研究の方法論を学んだ。都賀庭鐘に関しては、その作風から彼の創作意図を隈無く理解し作品を享受できたのは極めて限られた読者であったことが想像されるが、書物の流通に着目し、さらに広く一次資料に当たることで読者像に光を当てる必要があるだろう。